

英領南アフリカインド人コミュニティ一八九三年～一九一四年

― 年季契約労働者について ―

甲元 純子

はじめに

「ガンディの南アフリカにおけるインド人移民の地位向上の運動は南アフリカ在留インド人の一二〇年にわたる苦労話の一章分にすぎないかもしれない。低い社会的地位に甘んじ心情を掻き乱されてきた歴史においてガンディが疑問を投げかけたことは、南アフリカ在留インド人問題を重要な学問的問題認識の光の中に置いたことを意味する」⁽¹⁾

このように述べてトマス・R・メトカルフ (Thomas R. Metcalf) は、論文「南アフリカへのインド人移住者」の中で、モハンダス・カラムチャンド・ガンディ (Mohandas Karamchand Gandhi) が試みた南アフリカ在留インド人移民の状態についての研究の意義を強調した。メトカルフの問題提起をうけて、本稿はガンディが南アフリカ時代の植民地体験において、インド人年季契約労働者の状態をいかに調査し、英国臣民に対する人種差別の実情をいかに捉えたのかを明らかにするものである。

インド人コミュニティの実証的研究には、ナタール大学を拠点とした経済学者たちによる業績がある⁽²⁾。だが、ヒュー・ティンカー (Hugh Tinker) をはじめとする以降の諸業績は同大学の調査報告を引用する記述が多く、実証性に欠ける。こうした問題を克服するために、ガンディが同時代の出来事として注目した諸事実を手掛りに、年季契約労働者の状態を解明することは、新たな試みとして意義をもつものといえよう。

一、年季契約労働者の労働実態

ナタールの砂糖産業は基幹産業として著しい発展をとげた⁽³⁾。『ナタル統計年鑑』 (Natal Statistical Year Book) に基づき砂糖輸出力の推移をたどる。数値を挙げると一八六三年に一、二九七トン、翌年に約三・二倍の四、一五九トン、一八八六年に最高値七、六六〇トンを記録し、以後一〇年間横這いを保った⁽⁴⁾。だが、砂糖産業はつねに労働力不足の状況にあった⁽⁵⁾。経営側は労働力の供給源としてイギリ

ス植民地インドに注目し、一八五九年第一四法 (Law 14 of 1859) に従い年季契約労働者を導入した。⁽⁶⁾ 労働力の不足数に対する補充数を辿ってみよう。一八六三年の一、八八四人に対し一、八八四人、翌年の一、〇〇〇人に対し七五〇人、一八七三年の六、三〇〇人に対し六、〇二五人、一八八〇年以降四年間に一四、〇〇〇人に対し七、〇九七人、一八八五年の一、六七二人に対し七八三人、一八九六年以降四年間に二六、〇〇〇人に対し一四、〇〇〇人、一九〇六年の二二、七六〇人に対し六、三八〇人が調達され、労働需要は事実上平均七〇・五パーセントしか満たされなかった。

一八六〇年十一月クーリー移民担当官 (Coolie Immigration agent) E・ターザム (Edward Tatham) は司法長官への書簡⁽⁷⁾、トルロー号 (the Truro) 乗船分移民第一陣の到来の状況を、「習慣、名前に関して全く未知である外国人に圧倒された」と記した。⁽⁸⁾ ここには、インド人の殺到に対する率直な脅威の心情である『未知』なる『外国人』⁽⁹⁾ が示されている。インド人労働力の重要性が日毎に高まるなか一八八八年ターバンの経営者集会で以下の決議がなされた。「クーリーの導入はナタールの生産力拡大の主要因である。……導入中止は間違いなくとりわけ沿岸部の全事業を麻痺状態に陥れるだろう」⁽⁹⁾。一八九〇年代に年季契約労働者は、インドでの茶摘の経験を買われた茶農園の他、⁽¹⁰⁾ 石炭鉱山、政府鉄道建設等植民地全域で雇用された。⁽¹¹⁾ 一九一一年までの導入総数は一五二、一八九人に及んだ。⁽¹²⁾

砂糖プランテーションにおける労働実態の特質は何か。第一は職能別の階級区分化である。労働者は砂糖生産の集約化に伴い一八五

八年以降導入された圧搾機 (mill) を操作する熟練労働者、砂糖加工処理者、監督や親方等役職付きの者、サトウキビ (sugar cane) 栽培に携わる農耕労働者に分かれた。⁽¹³⁾ こうした管理と抑圧のためのヒエラルヒーの様態は、P・リチャードソン (P. Richardson) が指摘したように「熟練性と統制に基づき、人種的に区分化された一つの職業上の階層構造」⁽¹⁴⁾ だった。第二は虐待の日常化である。虐待は残忍性を極めた。要因は労働の強制が報酬ではなく罰則によることだ。

虐待の実情を示す事例として、農園主リスター (W. Lister) のプランテーションについて考察する。クーリー移民担当官メイスン (J. H. Mason) の調査は事実に基づかなかった。そして年季契約労働制に潜む害悪を明らかにする証言が、帝国本国及びインドに報告されなかった。それはなぜか。移民保護官の報告は日常的な体罰の実態に対して批判の眼を向けないことを通例とした。それは彼らが「雇用主の味方である」⁽¹⁵⁾ と認めたように、事実の隠蔽や年季契約労働制の問題性の誤魔化しに関して、植民地政府と経営側の馴合の実情を裏付けた。そうした実情は一八九七年以降農園経営者が内閣の大多數を占めたことによるところが大きい。つまり彼らには帝国に流れる富の追求のみが関心事であり、労働者の状態に関する記録は必要でなかった。このため両政府は度を越した事態の報告がなされない限り、労使間に干渉しなかった。こうした姿勢こそが労働者を服従的な立場に貶める主要因だった。

だが、リスターが不利となる証言がなされた。労働者バラキスト

ナ (Balakista) は「リスターはしばしば過失のためクーリーを縛り上げ、犀革製の鞭で打ち背中に塩水を浴びせた：私は再三鞭打ちのめに遭った者を五、六人知っている⁽¹⁶⁾」と証言した。また、労働者ムーンサウミー (Moonesawmy) は「リスターは大変粗野な男である。時々彼は私の首を縄で括って警察に突き出した。しばしば彼は私を鞭打った後、両手を縛り背中に塩水を浴びせた⁽¹⁷⁾」と証言した。これらの証言を受けてリスターは以下のように説明した。

「二人が私のプランテーションへ割当てられたことは不幸なことだった。二人は酷い虐待を受けた。クーリー達は欠勤、怠業、仲間への教唆を繰り返した。私はこうしたクーリーを何度も治安判事の前に突出した。：私はバラキストナとうまくやっていけなかった。クーリー移民担当官の同意を得て、私は彼の身柄を税務官ブレンコウ (Blencowe) の所に移したが、やはり手に負えず二カ月で戻されてきた。処分に対し時々クーリーは不服を申し立てたが、治安判事の調査の結果私が下した処分は正当化された。：首を縄で縛って警察署に突出した行為は、実際にクーリーが罪を犯していたこと、警察署が遠い事からみて通常なもので、結び目は緩かった⁽¹⁸⁾」。

労働者は日常の状態に堪え忍んだのか。一八七一年四月以降一年間に、四つの地区の雇用主九〇人が労働者に対する不満を表明したのに対して、労働者は一人が雇用主に対する不満を表明するのみだった⁽¹⁹⁾。それはなぜか。一八八五年労働者ムルキシナ (Mulukishna) は「時々親方は酷く残虐で、労働者の申し立てを隠蔽する。労働者は

が移民保護官に実情を訴えに出向くと、無断欠勤として罰を受ける。親方は恐喝行為を働き、無断で割当て食糧の給付を中止した。争議になると親方の陳述に正当性が認められた⁽²⁰⁾」と証言した。

こうした証言に示された抑圧的な統制が、植民地における労働管理の名の下に労働者の隷属化と抵抗の組織化の阻止に効力を有した。最も卑劣で有効な統制は、親方 (sindat) によるものだった。親方の特権は、犀皮製の鞭 (siamboke) による暴力の行使だった。統制は雇用主の要求の拒否や治安判事への抗議という労働者の選択を不可能にした。実例を示そう。一つは労働者が許可証を所持せず二マイル以上プランテーションを離れた場合、不満を述べる以前に無断欠勤のかどで罰金を課されたこと。いま一つは不満の陳述に成功しても、親方により労働者への脅迫行為や証人への賄賂の授与という不正な統制がなされたことである⁽²¹⁾。また法廷は不満の陳述に臨む労働者の意欲をそぐ最終的な役割を果たした。以下に一九〇一年一月親方が有罪となった事例を挙げる。親方は月に三度の暴行のかどで、三ポンドの罰金刑に処された。だが、親方の解任という一事例が「親方の地位に備わる権限を弱める傾向を生み出す⁽²²⁾」という経営側の懸念からもみ消された。労働者は移民保護官に窮状を述べるにとどまった。

虐待の証言は、年季契約労働制について雇用側にとって解放された自由な労働制度だが、労働者にとって「解放奴隷 (the liberated slaves)」の状態で貶められた制度だとする議論をよびおこした。だが、インド政府の移民送り出し要因は「過度に人口が殺到した地域の救済」であり、同政府は定住型移民を想定して当初中立の立場を

示した。⁽²³⁾ この姿勢は雇用側をより有利な状況に導いた。インド政府の「怠惰」という問題について、J・M・トンプソン(J. M. Thompson)は論文「ナタールへのインド人移民」で次のように述べた。「雇用契約書について、インド政府が担当官と移民の合意を確認しなかったことは、一つの重大な怠惰である。だがそれは契約時の決定は、強者が弱者に対して結ぶ価値の高い保護規定と見なされたからだ」⁽²⁴⁾。

労働者の不満は一八七二年インド政府の導入一時中止を決定づけた。経緯は次のようである。一八六六年「カルカタ・クーリー」と署名された書簡が『ナタール・マーキュリー紙』(Natal Mercury)に掲載された。書簡には労働状態に関する不満の他に、帰国時インド政府に対して植民地の状況を証言する承認をナタール政府から得たことが記された⁽²⁵⁾。この承認事項は一八七一年レッド・ライディング・フッド号 (the Red Riding Hood) 乗船帰国第一陣の到着を以て実現した。同年四月一八日マドラス出稼ぎ保護官は以下のように報告した。「帰国者のうち二人死亡し三八二人が上陸した。マドラス出身者の多くはプランテーション労働における処遇について大いに不満を述べた」⁽²⁶⁾。不満は契約労働を終えてナタールを立つ際、規定の渡航費用一〇ポンドを受け取っていない点で全員一致した。全般的な不満は割当て食糧に関して述べられた⁽²⁷⁾。不満の声を受けてインド政府は強く抗議した。「調査は現状に忠実でない報告をもとに作成された。ナタール政府は文面以上の重大な責任の意識を表明すべきだ。英国臣民である年季契約労働者という階級に対して有効な保護措置を講じるまで、導入中止措置を固守する」⁽²⁸⁾。

一八七二年三月七日農業と出稼ぎに関する委員会 (the Land and Emigration Board) 委員C・マードック (Clinton Murdoch) はクーリー監督制度の杜撰、一八五九年第一四法に則る半年毎のプランテーション調査の不履行と医療義務の無視を指摘した⁽²⁹⁾。ナタール政府は導入再開にあたり、一八六四年第一六法の撤回をはじめ一八七四年に諸改善を試みた。第一はインド人移民保護官 (Protector of Indian Immigrant) の任命だった。移民保護官には一八七〇年第二法 (Law 2 of 1870) に則り年季契約労働者の権利を保障する高圧的な権限が付与され、インド式結婚登録、半年毎のプランテーションの視察訪問等を責務とした⁽³⁰⁾。第二は雇用主で構成された移民監督委員会の任命だった。

ガンディは労働者の虐待について知った体験から、年季契約労働制度について考察した。一八九四年マドラス出身のバラスンダラム (Balasundaram) は、雇用主から前歯二本を折られる虐待を受けてガンディに窮状を訴えた。雇用主は事実を偽った。真相は体罰を受けて労働者は移民保護官の役所を訪ねたが、雇用主の指図で事前に施錠され追い返されたということだった。宣誓供述書の提出を受けて治安判事は雇用主に召喚状の提出を命じた。ガンディは労働者を雇用主との契約関係から解放する方策を採った。彼は年季契約労働に関する法律を研究し、自由労働者との法的立場の違いを見出した。年季契約労働者は雇用主から逃亡すると禁固刑に処せられる点について、彼はW・W・ハンター (William Wilson Hunter) が年季契約労働制度を「半奴隷的状态 (one periously near slavery)」と断

じた所以を理解した。則ち年季契約労働者は奴隷と同じく、雇用主の財産にすぎなかった。⁽³¹⁾ バラスンダラムの事例を契機に、ガンディは移民保護官の任務に疑義を呈した。彼は移民保護官がプランテーション調査に赴いた際、雇用主らの甘言により公正な判断が妨害される事態を問題視した。⁽³²⁾

こうした冷遇の実態の表面化は、年季契約労働者導入反対論を導いた。ガンディは人道上の観点から、一貫して導入反対の姿勢をとってきた。しかし、インド政府は導入問題の背景に「辺境に位置する窮乏国」というイギリス帝国におけるインドの立場を考慮して明確な発言を控えた。⁽³³⁾ 一九〇二年インド総督カーゾン(William Curzon Wyllie)は年季契約労働者の導入について次のように酷評した。「ナタールが欲するものは植民地に利得をもたらす労働力であり、私たちとの競争ではない。…私たちはインド人の利害の守護者であり、すでに帝国主義的政治の議論の水面に出来た「生々しい傷」を広げる意向はない」。⁽³⁴⁾

ガンディは南アフリカの議論が、年季契約労働者の最終的な導入中止に結実した直接の契機を、一九〇七年ソーンビル交差点で発生した年季契約労働者暴行殺害事件に認めた。犯行に及んだ白人植民地住民の処分は、罰金一〇ポンドにとどまった。ガンディは犯人への報復を試みず、年季契約労働制度の害悪性を問題視した。事件をうけて弁護士T・ロビンソン(T. Robinson)が演説の中で、導入中止を訴えた際インド人側の同意を得たため、ガンディはインド人コミュニティの意思決定機関であるナタール・インド人会議(the Natal

Indian Congress)を通じてインド政府に措置を促した。⁽³⁵⁾ 年季契約労働者の奴隷化への終止符という重要な視点を打出した同胞の議論について、ガンディは「年季契約労働者に負わされてきた苦難に立腹する様相を認めるのは喜ばしい。これはインド人コミュニティ覚醒化の徴候だ」と述べた。⁽³⁶⁾

ガンディは導入中止をめぐる白人植民地住民の心情は、雇用主にかかる重い経済的負担や、インド人との対等の交際への嫌気を示す利己的かつ傲慢な性格のものだと論じた。経済的負担に関して一九〇七年移民委員会総裁リクロフト(Rycroft)は雇用主への書簡の中で、導入費用の実情は規定額を大きく越えていること、そして人頭税を嫌って帰国希望者が増加する程、雇用主の負担の度が増すことを指摘した。⁽³⁷⁾ インド人との交際に関して弁護士ターザム(Tatham)は演説の中で、文明化の優劣を根拠に市井においてインド人と交ざり合う生活や、彼らの進歩に否定的態度を示した。このように白人植民地住民の心情に、ヒューマニティという観点は認められなかった。一九一一年七月年季契約労働者の導入は中止された。ガンディは年季契約労働制度について、最終的な導入中止措置を講じる段階にのみ強制力を働かせたインド政府の怠惰により存在を許した歴史上の誤りであると断じた。⁽³⁸⁾

このように年季契約労働者の労働実態は、過去の奴隷労働者に負わされた非人間的性格を色濃く残すものだった。彼らは虐待されても行為者に刑罰を要求できず、逮捕されても裁判の権利を認められず、容易に雇用契約から解放されることもなかった。ガンディは彼

らの労働実態について知る経験から、英領南アフリカにおける社会経済的諸状況にみられる悪い徴候を認め、経済と社会の状態を明らかにすることその根源を見極めようとした。

二、年季契約労働者の経済の状態

年季契約労働者の経済の状態はいかなるものか。生活水準の実相は「労働者五、〇〇〇人のうち約五パーセントにあたる二六〇人が、政府給付割当て食糧で生き延びている」という一八六八年の報告によく示されている。なぜ生存維持的な生計を営む労働者が存在したのか。それは以下の植民地搾取を要因とする。第一は低賃金である。年季契約労働者に定められた最低賃金は原住民の一二シリングを下回る一〇シリングであり、生計が辛うじて成り立つ程度の熟練自由労働者の賃金と一五シリングもの格差が生じた。こうした状況に加えて労働者チェラペン（Chellapen）の証言に示されているように、砂糖産業労働者は数か月も無給だったり、不当に半額またはそれ以下に減給される場合がまれではなく困窮を極めた。⁴⁰ 賃金の状態を明らかにするためにガンデイは一九〇二年移民保護官の報告を受けて貯蓄額について以下のように考察した。

「一九〇二年のインド帰国者二、〇二九人の貯蓄は現金・宝石類総額三四、六九〇ポンド、一人当り一七ポンドである。出身地別内訳としてマドラス出身一、五四二人の貯蓄総額は二七、四一七ポンドで、一人当り一八ポンド、カルカッタ出身四八七人の貯

蓄総額は七、二七三ポンドで一人当り一五ポンドである。白人の判断では貯蓄が一七ポンドあれば帰国後不自由なく生活できると見込まれたが、貧窮極まる不安定なインドの実情において、そうした金額は一人の人間の生活を長きにわたり保障し得るものではない。⁴¹」

貯蓄額は帰国後どれ程の価値を有したのか。実情は一八九四年八月八日パーシー・ラストムジ（Parsee Rustumjee）等による総督への陳情に記されている。「一〇年間の契約労働による給料総額は八七ポンドに達する。労働者が五〇ポンド貯蓄しても、インド農村経済の貧困を考慮すると精神と肉体を維持するのに十分ではない。それ故労働者が帰国すると、土地もなく年季契約労働を強いられて一生を隷属の境遇で送る」⁴²。つまり年季契約労働者は帰国後の生活を保障する生活維持経済の所得水準に達しなかったことがわかる。このことは南アフリカでの契約期間満了時の人生の選択上大きな要因となった。

賃金の状態は変化したのか。一九〇四年以降の帰国時の平均貯蓄額を辿ると一九〇四年に一六ポンド、一九〇五年に一一ポンド、一九〇六年に一四ポンド、以後三年間は八ポンドだった。そして一九一〇年移民保護官代理の報告書に注目してみよう。「インド帰国者一、八二一人の貯蓄は現金、宝石類総額三一、二八四ポンドで、一人当り一七ポンドである。出身地別内訳としてマドラス出身者は二〇、七五二ポンド、カルカッタ出身者は一〇、五三二ポンドだった」⁴³。こうした金額から賃金の引き上げはなく、生存維持的な状況が続いた

ことが窺える。

第二に、不当な罰則について、一八六五年一月インド人移民担当官H・C・シェプストーン(H. C. Shepstone)は植民地相に次のような報告を示している。「年季契約労働者の労働管理について、無断欠勤や病欠という違反行為への罰金には問題がある。…罰金のため労働者が翌月分の給料を前借りする事例もある。また労働者は体罰を恐れて治安判事のもとへと不満を申し出ない」⁽⁴⁴⁾。このように雇用側の主要な関心事は、労働力の節約であった。実相は罰則や生産性の有無に因る割当て食糧の不当な減量や安価な食品への変更によく示されている⁽⁴⁵⁾。

なぜ彼らは欠乏した労働者(insufficient worker)に貶められたのか。砂糖産業は鉄道建設事業のように高い賃金体系が形成されなかったために、一二―一五シリングを条件とする原住民の要求に応えられなかった。このため農園経営者や白人植民地住民は、年季契約労働者とは原住民労働力の一時的不足を補う安価で、継続的かつ安定した補充が確実な統制しやすい労働力とみなしていたことが考えられよう。

こうした植民地的搾取は、一八九四年移民法修正法(the Immigration Law Amendment Act)に基づく三ポンド税の課税により一層劣悪化した。ガンディは「血税(blood tax)」の立法化の背景を次のように論じている。⁽⁴⁶⁾白人植民地住民は年季契約労働による利益の極大化に期待し、自由労働者化した契約期間満了後の収益に期待した。だが、前年季契約労働者は否定的な結果をもたらした。ガーデ

ン・プランターはインドの野菜の安定供給を可能にしたため、ナタール産野菜の価格低下をもたらし、T・バンブー・ナイドウ(T. Banboo Naidu)やサンダー・シン・ナート(Sunder Singh Nath)ら商人は白人商人の営業権を脅かす商才を示した。

移民法修正法は契約期間満了後労働者はインドに帰国するか、二年毎に契約を更新し昇給されること、また自由労働者化する場合の三ポンド税の徴収を規定した。数年後三ポンド税は家族からの徴収も義務付けられた。一九〇〇年頃自由労働者の賃金はひと月当り三〇シリング程度だったが、一九〇七年頃には二〇シリングまでに落ち込んだ。こうした状況での税の徴収について移民保護官は、夫婦のみの世帯の生活の維持が不可能だと報告した⁽⁴⁷⁾。一九〇三年に一二・五パーセントの労働者が納税したと報告された⁽⁴⁸⁾。これらの報告を受けてガンディは実情として、月給一四シリング子供二人の世帯から一四ポンドの徴収を断行する法の狙いについて、インド人の排斥にあると認めた。

以上の考察から、年季契約労働者は移民の動機である経済的成功という期待を絶望させる植民地的搾取を受けたために、栄養価不足の割当て食糧を拠り所とする生存維持的な状況に甘んじた。彼らは現地の人々と異なり、単純労働と激務を当然とする伝統的な労働価値観のままに生きていた。この観念のため彼らは自由労働者として富を築いたが、人頭税である三ポンド課税という政府当局の抑圧に苛まれた。それはできるだけ多く年季契約労働者を導入して利益を貪った後、解放された前年季契約労働者を根こそぎ追い出そうとす

る白人の政策だった。

三、年季契約労働者の社会の状態

(一) 自殺について

年季契約労働者の中には労働状態に反発する者もいた。C・F・アンドリュース (Charles Freer Andrews) は自殺の実態を考察して、示唆に富む結論を述べた。「ナタール滞在第一日目私はマクニールの報告書と照らして、同程度の自殺者を出すであろう状況を認めざるを得ない。衛生設備、救済制度、医療の状態に大いに驚いた。…年季契約労働制は道徳的にみて根本的に誤った制度であり、その程度は奴隷制を僅かに改良したくらいである」⁽⁹⁾。

一八六四年二月労働者マッケンディ (Muckendey) の首吊りを最初の事例として、一八九〇年代から増加した自殺は、冷遇の酷さの指標として注目された。一八八四年労働者ラマイヤ (Ramaiya) の自殺に関する医師 R・R・アレン (Richmond R. Allen) の報告書には次のように報告されている。

「一八八四年九月二日朝、雇用主マクイワン (A. C. McEwan) は一人の労働者の死亡を申し出た。私はタウン・ヒルにあるマクイワンの農場に赴き現場をつぶさに検証した。…内側から鍵の掛かった戸を壊して中に入ると、中央でロープを掛けた梁に吊り下げられたラマイヤが死んでいた。検死上の所見として年令三三才、均整のとれた体格で栄養状態は良く、死後七時間、一〇時間が経

過し死後硬直が認められた。他に外傷はない。着衣の様子はコートにズボン姿だった。…何度か首吊りを試みた挙げ句、彼は往生した。そのことはターバンがロープ状に捻られ、破れた布が床に落ち、また梁に掛かっていた形跡から断定できる。解剖学的所見として縄は正確に頸部に掛けられ、結び目は頸動脈と右首筋の頸静脈を圧迫し脳卒中を起こした。自殺に至った経緯から自殺の原因を明らかにしたい。彼は変り者だった。視点が定まらず怯えた目付きから、知的障害の徴候が認められる。こうした徴候から常習的な大麻 (daktar) の吸引が考えられる。彼の性格は従順なところがなく、躁鬱症の傾向が認められ仲間から常に恐れられたが勤勉な働き手だった。彼は妻を一年前に亡くして孤独だった。自殺に至る重要な前兆は日曜日に頭を刺ったことに認められる。彼は翌日の午前一時から妄想状態に陥り、病んでいると告げた。数人の原住民が彼の殺害を企てたため彼は小屋に閉じこもり水も飲めない状態を強いられ、精神異常をきたしついに自殺した。こうした考察から、大麻の吸引という違法行為を犯した末の自殺と判断される」⁽¹⁰⁾。

こうした報告をうけて一九〇四年六月二九日 D・ナオロジ (Dadabhai Naoroji) はインド省に対して、年季契約労働者の異常な自殺率について訴えた。彼は自殺の実態がイギリスで問題化されたにも拘らず、政府当局が調査の必要性を否定したことを第一の問題点とした。理由として植民地相 A・リッテルトン (Alfred Lyttelton) は、下院議員 M・ボーナグリー (Mancherjee Bhownagree) への電報

の中で、低い自殺率を示した。⁽⁵¹⁾だが実際にナタールにおける自殺者数は、インドにおける数値の一〇倍に相当し、また英領砂糖植民地で高い数値を記録した。⁽⁵²⁾移民保護官はリッテルトンの報告のように綿密な調査の必要性を訴えた。そして一八九六年移民保護官は以下のように報告した。

「一八九六年の年報はプランテーション労働に従事する年季契約労働者の自殺発生数への注目を喚起した。今年は八、八二八人中六人だったが、二年前は多人数を記録した。こうした数値はいくつかのプランテーションにおいて、奴隷狩りと酷似した処遇に関する疑念を生む。もっとも重要なことは自殺が特定のプランテーションで発生したことであり、調査の必要性を訴えるものである。南部のプランテーションから数人の労働者が逃亡した事件において、逃亡者達は法廷で公然と雇用主のもとに戻るよりも自殺を選ぶと述べた」。⁽⁵³⁾

死因は何か。一八八〇年から一九一一年迄の自殺者リストを分析すると、総自殺者数三四六人の内、ターバン (paguree) を掛けた首吊り (Vata) が三一六人、喉の掻き切りが八人、溺死が三人、線路への飛込みが八人、毒物の服用が二人、銃による自殺が三人だった。⁽⁵⁴⁾自殺者の多いプランテーションは、一九〇六年植民地省の大農園別自殺率リストによると、一位はレイノルズ・ブラザーズ (Reynolds Brothers) で三二・七パーセント、二位はトンガート砂糖会社 (the Tongat Sugar Co.) で一五・三パーセントだった。⁽⁵⁵⁾

ガンディは自殺の実態について帝国支配層の目を開かせるため『ブ

リタニカ百科事典』(Encyclopaedia Britannica)を引用しながら「自殺の発生は治療の可能性の如何を問わず、政治的統一としての国家に見られる様々な社会の病弊の徴候と見做される」と説明して、自殺問題の本質は植民地社会の病弊だとする見解を提示した。

第二の問題点は白人植民地住民が自殺の要因を、インド人の民族性に帰したことである。ガンディは『リタニカ百科事典』の一八八二年の統計からバリの民衆の自殺率一〇〇万人中四二二人という数値をあげてサクソン民族の高い自殺率を示し、彼らの認識を否定した。こうした考察からガンディは、「現時点でインド人は年季契約労働者の自殺の事態について誰一人非難する意向はなく判断を保留にする。…正義とヒューマニティの観点から真相を明らかにすべきだ」と論じた。こうした議論は「雇用主にいかなる影響も及ぼさずとなく双方の利害に関して公平な、事実上正確な調査を要求する」インド人の守勢な姿勢をよく示した。⁽⁵⁷⁾本国政府当局が自殺の統計に関心を向けたのは年季契約労働制度の終結間近だった。

自殺の原因は何か。自殺の原因には疾病、恋愛問題、家庭内争議といった私的領域の問題及び労使関係等が挙げられるが、F・メーアは著書『南アフリカにおける人種と自殺』(Race and Suicide in South Africa)の中で、社会学的視点から議論した二者の見解をもとに明らかにした。エミール・デュルケーム (Émile Durkheim) は著書『自殺論 社会学的考察』(Suicide : A Study in Sociology)で、個人と社会という視点から個人の社会的統合 (social integration) の度合いに、自殺要因を推し測ろうとした。インド人労働者につい

て考えてみると、彼らは植民地社会において少数派集団という属性を示した。彼らは安価な労働力として期待されたが、契約期間満了後は必要とされなくなった。メーアはデュルケームの見解をうけて、自殺はこうしたインド人の社会的統合における安定性と永続性の欠如を前提としたと述べた。デュルケームは社会的統合の不完全性が集団的自殺傾向への免疫性を弱め、利己主義という基本的な要素が自殺の要因を増大させるものと論じた。こうした議論を受けてメーアは、ステンゲル(Stengel)の見解をめぐり、利己主義的自殺(Egoistic suicide)の要因として自己疎外(alienation)を指摘した⁽⁵⁸⁾。メーアはこのように議論を紹介したが、なぜ労働者が自己疎外に陥るのか。労働者は地縁的・血縁的関係を断ち、文化と言語を異にする植民地の閉鎖的空間であるプランテーションで孤独を抱いて働く。植民地社会では彼らを援助するインド的要素をそなえた社会・文化的構造は存在しない。こうした実情から労働者がインド人であるという自尊心を喪失したのであった。

なぜ自尊心が重要なのか。マドラスのある官吏の以下の言葉は示唆的である。「出稼ぎ労働者は自尊心の偉大な教師である。抑圧された諸階級の意識の成長にこの上なく寄与したのは、恐らく現時点における出稼ぎ労働者の存在であろう⁽⁵⁹⁾」。労働者はインドとの繋がりを言語的特質、精神文化的特質として意識しただけでなく、自らの身体に刻む傷や刺青の場所で保持した。トルロー号、ベルビデラ号(the Belvidera)・スキンディアン号(the Scindian)・サクソン号(the Saxon)・ブレンハイム号(ss. Blenheim)の乗船リストをも

とに一、九四六人について出身地別に分析する。民族的出自を刻した皮膚の痕跡(marks)に注目すると、カーストを示す印(Godna)と刺青はマドラス出身者であることを示す⁽⁶⁰⁾。乗船リストのカースト項目の分析によるとマラバル(Malabar)が大多数で、次いでジェントウ(Gentoo)とクリスチャン(Christian)がほぼ同じ割合を占めている。切傷の痕(Scar)はカルカッタ出身者であることを示す。こうした分析からマドラス出身者は民族的出自の保持に努め、自尊心をとりわけ強く意識したことがわかる。

ガンディはコミュニティの発展過程における自尊心の保持という労働者の意識に自律性を看取し、こうした心的共通基盤であるインディアネス(Indianness)の植込みの様相に注目した。インディアネスとは何か。彼は一九〇五年二月講演で「インディアネスは民族に備わる一つの極めて重要な特徴⁽⁶¹⁾」則ちヒンドウイズム(Hinduism)であると論じた。ヒンドウイズムとは何か。彼は単にヒンドウ教の教義であるとする狭義な捉え方を否定した。彼はヒンドウイズムとはインド固有の精神文化的伝統を背景にそなえ、譲歩の精神(the spirit of compromise)を真髄とするものと論じた。

虐待を特質とする雇用関係において、なぜ労働者はヒンドウイズムに基づく心的態度を示したのか。ガンディは彼らの意識について一九一四年七月一二日ベルラム(Verulam)での演説で次のように述べている。

「年季契約労働者はひどく弱い立場にあるが、発言の機会が与えられれば大いに美徳を示す。彼らは衛生的な住居を求めて請願

し、白人植民地住民との共通性を否定されたアジア人としてではなく仲間として見なされることを要求する。彼らは人間である……労働者は精神的圧迫に應えることができ、民族的出自や肌の色の如何を問わず人間は確かに高位な道徳性を実現しうると考える人々である」。

年季契約労働者は植民地において、道徳に適った精神的圧迫に対しては、ヒンドウイズムに自らのあるべき姿をおいて内面化し、あくまで和合 (unity) を追求する姿勢から譲歩を以て受け入れるという「高位な道徳性」を具現しようとした。

(二) 教育について

高い段階に到達したインディアネスと教育とは、市民的身分の獲得という位相において結び付くものであった。インド人の教育は英国化 (Anglicization) を狙いとする伝道活動の一貫として開始され、白人植民地住民の慈善的援助によって支えられた。だがガンディはマコーレー (T. B. Macaulay) が定めた英語教育に関する基本構想は、インド人の奴隷化につながるとして批判的だった。学校教育の普及の実態はいかなるものか。クローリー委員会は一八七二年次のように報告している。

「クローリーの子弟向けの学校は四校を数えるのみで、年間平均六八ポンドの援助を政府から受けている。クローリー伝道監督官 (Superintendent of the Coolie Mission) ストット (Stott) には学校設立の意志はなかった。……委員会は適切な監督下で彼らが

教育を受けることを強く政府に主張する」。

一八七四年教育委員会は勧告を受けて移民保護官の承認の下にインド人の就学の強制を定めた。一八八六年インド人学校調査官 F・コルペパー (F. Colepeper) が報告したように、高い就学率はインド人の肯定的特性である教育熱のみならず、知的水準の高さをも示した。⁽⁶³⁾

ガンディは一八九九年ナタールの教育について次のように報告している。

「当時生徒数二、〇〇〇人の年季契約労働者の子弟向けの学校は二五校あった。校舎の構造は旧式かつ粗末で、厩が代用される例もあった。生徒の身形は悪かった。商人、通訳、商店主等比較の高い社会的地位にある労働者の家庭では、高い授業料を負担して白人植民地住民向けの公立学校に通わせた。数年前から年季契約労働者向けの学校の経営が成り立つ場合、インド人子弟を公立学校に通わせない運動がおこるなど諸難局が立ち現れた」。⁽⁶⁴⁾

一九〇〇年頃には労働者の子弟は政府立高等学校のみならず、小学校に通う権利も奪われた。こうした実態に認められるのは、階層区分化をはかる教育の開始に伴い人種間の人数調整を目的とする教育の場における隔離だった。階層区分化をはかる教育は一八八二年頃より移民学校委員会 (the Immigration School Board) により着手された。一八九四年二月教育評議会 (the Council of Education) は「インド人もしくは原住民向けの学校の近隣に生活するこれらの国籍の子弟は、白人植民地住民向けの政府立学校への通学を認めな

い」という決議を打ち出した。こうした措置に対してガンディは、ナタール政府は白人植民地住民多数派の圧力に怯み、インド人の教育の権利の擁護に関して無力であると批判した。⁶⁶⁾

では、教育の成果は移民第二世代 (Colonial-born Indians) の職業構成にいかなる影響を及ぼしたのか。ガンディは彼らの社会的上昇の事例として、弁護士B・ガブリエル (Bernard Gabriel) について紹介した。彼の両親は年季契約労働者だったが、子供達に生活を犠牲にしてイギリスの自由主義教育を受けさせたことを誇った。ガンディはこの事例に、低賃金の所得状況にあつてごく初步的な宗教教育以外は望めない貧困層の子弟に対する優れた学識への到達の可能性と、両親の教育への熱意を認めた。⁶⁶⁾ だが、インド人コミュニティの階層分化のひとつの指標となる職業構成の実態をみると、一九〇〇年代に至っても旧態依然で、社会的上昇の徴候は見出せない。

職業構成に関して一八九六年の統計と一九〇六年の統計を比較し、実相を明らかにしたい。一八九六年に前年季契約労働者は三〇、〇〇〇人に及びその内訳は、召使、小規模農園経営者、野菜行商人、果物商、鍛冶屋、職人、小商店主、校長、写真家等で、一六、〇〇〇人は年季契約労働者だった。一九〇六年のインド人登録官M・シャムニー (M. Channey) の報告では、行商人三、〇八六、雑貨商一、〇五四人、食物雑貨商一三、五五人、食堂経営者、肉屋、洗濯屋、果物屋、パン屋、牛乳屋という構成で、依然職業的下降の様相が認められた。⁶⁷⁾ それはなぜか。一九〇九年インド人移民委員会は、移民第二世代の労働価値観について次のように報告している。「彼らは年季契

約労働を拒絶する。彼らは単純で大変苛酷な年季契約労働は面白くないと思う。彼らはむしろ断続的な軽作業による不安定な生活を、都市部で送ることを望む。多くの者は全く怠惰で放浪生活を送る」。⁶⁸⁾ また、教育大臣はプレトリア協議会 (the Pretoria Conference) において、「労働を恐れる机上の教育を受けた子供達がいる。彼らは力仕事は『カフィール人の仕事』だと考える。こうした者達に社会的上昇の見込みはない」と報告している。

こうした報告を受けてガンディは、ダーバンで開催された原住民産業展覧会 (the Native Industries Exhibition) における報告をもとに移民第二世代の社会的上昇について次のように述べている。「移民第二世代には立派になろうとする希望がない。教育は単に店員の育成に役立つのみだ。産業もしくは商業に関する実務的訓練が、人生のみならず公的奉仕 (Public Service) の素養を身に付ける最良の方法だ」。⁷⁰⁾ 彼は第一に移民第二世代の怠惰な労働観を指摘し、彼らの心的態度を問題視した。第二に彼は人種的障壁として白人植民地住民が設けたセグメンテーションに基づく経済的機会の不均等を指摘した。彼らは社会的地位の心象である威信 (prestige) の保持を図り、インド人労働者を半野蛮人の状態にとどめ、社会的上昇の地歩を築かせなかった。

本稿において、このように労働者の社会的状態について考察したが、彼らは英国臣民に相応しい社会的状態を享受するための二つの条件をみたしていた。第一にインドはイギリス帝国の一員であること。第二に彼らは勤勉かつ誠実で遵法精神に富み、南アフリカの富

の発展に大いに役立ったことである。だが、労働者は社会から放逐された人々 (outcast) に位置付けられた。彼らは南アフリカの社会経済的状况下で弱者として、半野蛮人の生活 (semibarbaric life) を送るべき者として区分されたこと、イギリス帝国は臣民に対する侮蔑の事態を支援し支持したことを労働者は初めて意識した。

おわりに

英領南アフリカに導入されたインド人年季契約労働者は、労働者としての性格に関して、半奴隷という非人間的要素を決定要因として押しつけられたため、白人移民とは著しく異なる植民地的搾取、虐待、機会不均等といった経済的従属に基づく植民地体験をした。そして、本稿における考察の結果、非人間的要素のためにガンディが注目した年季契約労働者を取巻く諸状態のすべてにおいて、白人植民地住民の非白人に対する人種差別感を指摘することとなった。白人植民地住民は異質な年季契約労働者との接触という日常の経験から、植民地社会における人種偏見という社会的・経済的・文化的規範の体系に基づいて「インディアン・ペリル・ヒステリア」(Indian Peril Hysteria)を指向した。こうした心的態度を抱く日常生活において、白人植民地住民は白人であることを理由に人種の統合を強め、自らを優位に置いてインド人植民地住民に対して社会的隔離と経済的従属を強要する人種差別的枠組みを形成した。

注

- (1) Thomas R. Metcalf, "Indian Migration to South Africa", in M. S. A. Rao, *Studies in Migration*, Manohar 1986, p. 345.
- (2) 同大学から主に一九三〇年代以降の実態に関する調査報告として『ナタール地域研究』(*Natal Regional Survey*)が刊行された。Report No. 10の中でマベル・バルマーがインド人移民の導入について概観した。ナタール在留インド人移民に関する初期の業績にはバルマー著『ナタール在留インド人の歴史』(*The History of the Indians in Natal*)がある。近年スレンドラ・プハナらは著書『ナタール在留インド人年季契約労働者についての小著』(*Essays on Indentured Indians in Natal*)の中で砂糖産業労働者等の労働実態と抵抗について検討した。Y・S・メーア編『年季契約労働者についての記録一八五一年―一九一七年』(*Documents of Indentured Labour, 1851-1917*)は労働者の証言、諸委員会報告、乗船リスト等を挙げた貴重な一次史料集であり注目に値する。
- (3) E. A. Walker, *The Great Trek*, London 1938, pp. 125-130.
- (4) Mabel Palmer, *The History of the Indians in Natal*, Cape Town 1957, p. 38.
- (5) *Ibid.*, p. 45. エバンス (Evans) は「熱帯生産物の生産高増大には外国の自由有色人種労働力を導入することが絶対的に必要である」と述べた。The Durban Observer, Oct. 17, 1851, No. 9, in M. Palmer, *The History of the Indians in Natal*, p. 34. 経営側は原住民に関して農園耕作の単調な重労働には不適性と断じた。L. Marguard, *The*

People and Policies of South Africa, London 1952, p. 84.

- (9) Y. S. Meer (ed.), *Documents of Indentured Labour, 1851-1917*, Durban 1980, p. 41. 規定はクーリー移民担当官の任命、労働時間と最低賃金の指定、医療、食糧と衣料の給付、住宅の割当などを定めた。

- (10) A. G. Choonoon, 'Indentured Indian Immigration into Natal, 1860-1911', in Y. S. Meer (ed.), op. cit., p. 18.

- (11) Colonial Secretary's Office Tatham to Colonial Secretary of Natal, 19 November, 1860, in M. Palmer, op. cit., p. 23.

- (12) *The Natal Almanac Directory and Yearly Register for 1895*, p. 376, in L. M. Thompson, 'Indian Immigration into Natal 1860-1872', 1938, pp. 30-31.

- (13) 茶農園では作業の特性上及び統制上、女性労働力が多く期待された。J. D. Beall, 'Woman under Indenture in Natal', in S. Bhana (ed.), *Essays on Indentured Indians in Natal*, 1990, pp. 89-115.

- (14) *Archives year book from South African History*, 15 year Vol. 11, Pretoria, p. 41.

- (15) S. Bhana, 'A Historiography of the Indentured Indians in Natal : Review and Prospects', Mauritius, October 1984, pp. 14-15.

- (16) Y. S. Meer (ed.), op. cit., p. 8.

- (17) W. R. Guest (ed.), *Aspects of the Economic and Social History of the Colony of Natal*, Pietermaritzburg 1985, pp. 180-197.

- (18) J. D. Beall & M. D. North-Coombes, 'The 1913 Disturbances in Natal : The Social and Economic Background to Passive Resis-

tance', in *Journal of Natal and Zulu History*, vol. 6, pp. 48-81.

- (19) Hugh Tinker, *A New System of Slavery*, London 1974, p. 222.

- (20) *Ibid.*

- (21) Y. S. Meer (ed.), op. cit., p. 80.

- (22) Y. S. Meer (ed.), op. cit., p. 11.

- (23) *Wragg Report*, 1887, p. 99, in Y. S. Meer (ed.), op. cit., p. 245.

- (24) the Indian Immigration records (南アフリカ共和国) 1/1/87, 1500/9, Natal Archives, in S. Bhana (ed.), *A documentary history of Indian South Africans*, Cape Town 1984, p. 28.

- (25) I. I. /104, 2033/01, Natal Archives, in S. Bhana (ed.), *Ibid.*, p. 30.

- (26) M. S. A. Rao, *Studies in Migration*, Manohar 1986, p. 345.

- (27) L. M. Thompson, op. cit., p. 40.

- (28) Y. S. Meer (ed.), op. cit., p. 35.

- (29) the Protectors of Emigrants in Madras wrote to the Chief Secretary of his Government, on April 18, 1871, in M. Palmer, op. cit., p. 22.

- (30) Y. S. Meer (ed.), op. cit., p. 13.

- (31) Government of India, Calcutta, 10 May 1872 to Lord Kimberley, in M. Palmer, op. cit., p. 23.

- (32) *Coolie Commission Report of 1872*, in M. Palmer, op. cit., p. 28.

- (33) Despatch No. 49, in Y. S. Meer (ed.), op. cit., p. 76.

- (34) *Indian Opinion*, 16 May, 1908.

- (35) *Wragg Report*, 1887, p. 123, in Y. S. Meer (ed.), op. cit., pp. 254-

256.

- (33) *The Natal Advertiser*, 14 January, 1897, in M. Palmer, op. cit., p. 29.
- (34) Note by Curzon of 24 May, 1902, in *Natal Indian Emigration Programmes*, June 1902, No. 21-22.
- (35) *Indian Opinion*, 15 June, 1907.
- (36) *Ibid.*, 20 July, 1907.
- (37) 統計を挙げると一八六七年の労働者の導入費用は成人男子一人当り七ポンドだったが、一九〇五年には規定費用二〇ポンドを大きく超過し二一ポンド一〇シリング九ペンスだった。
- (38) *Indian Opinion*, 9 May, 1908.
- (39) *Archives year book from South African History*, Vol. 11, Pretoria, p. 41.
- (40) Y. S. Meer (ed.), op. cit., p. 95.
- (41) *Indian Opinion*, 14 June, 1902.
- (42) India Government, *The Collected Works of Mahatma Gandhi*, 1964, Vol. 1, pp. 232-242.
- (43) Y. S. Meer (ed.), op. cit., p. 648.
- (44) *Coolie Commission Report*, 1872, p. 36, in M. Palmer, op. cit., p. 23.
- (45) 規定の割当て食糧は成人男子一日当り一・五ポンドの米或は週三度二ポンドのトウモロコシ粥と米、その他毎日豆類、塩、干し魚、油であり、女性と二才以下の男子は規定量の半分だった。
- (46) M. K. Gandhi, *An Autobiography*, Ahmedabad 1927, p. 110.
- (47) *Natal Statistical Year Book*, 1900, part 8, p. 264.
- (48) M. Palmer, *The History of the Indians in Natal*, 1990, p. 58.
- (49) Problems Concerning Coolie Agent, Document 35, in Y. S. Meer (ed.), op. cit., p. 134.
- (50) *Indian Opinion*, 20 August, 1904.
- (51) リッテルトンは自殺についてインド人一〇〇万人中七七六人という事実認識だった。自殺に関する公式な調査の欠如は年季契約労働者への非人間的な扱いを本国政府が容認することを意味した。
- (52) 一八七五年から一九一一年の移民保護官年報の自殺リストには三四四件が記録され、その内一八九〇年から一〇年間の平均自殺者数は三人、一九〇〇年から一〇年間には三四人、一九〇六年頃は最悪の状態で四六人、翌年は五人だった。
- 自殺者数の第一位はフィジー諸島で一〇万人中七二・七九人、第二位はナタールで六三・三八人、第三位はジャマイカで五六・〇五人、四位はモーリシャス、第五位はトリニダードだった。
- S. Bhana (ed.), *Essays on Indentured Indians in Natal*, p. 139.
- (53) S. Bhana (ed.), *Ibid.*, p. 169.
- (54) S. Bhana (ed.), *Ibid.*, pp. 174-179.
- (55) S. Bhana (ed.), *Ibid.*
- (56) *Indian Opinion*, 20 August, 1904.
- (57) *Ibid.*
- (58) E. Durkheim, *Suicide : A Study in Sociology*, New York, 1951.
- F. Meer, *Race and Suicide in South Africa*, London 1976, p. 18.

- (65) Madras Government to Government of India, 19 March 1883, in *Emigration Proceedings*, 1883, in H. Tinker, op. cit., p. 60.
- (66) Y. S. Meer (ed.), op. cit., pp. 55-60, 68-92, 180-201.
- (67) *The Star*, 4 March, 1905.
- (68) *Report of Coolie Commission*, August, 1872, in M. Palmer, op. cit., p. 256.
- (69) 政府立学校の数と生徒数の一年毎の推移を示す。一八八二年一七校の三三三人から一七校に九七一人、一八校に一、一六八人、二二校に一、二七五人、二四校に一、五一八人と著しく普及した。
- (69) *The Times of India*, 19 August, 1899, in Y. S. Meer (ed.), op. cit., p. 605.
- (69) *Indian Opinion*, 31 December, 1904.
- (69) *Ibid.*, 23 September, 1905. 弁護士について挙げると、ジョゼフ・ロイペッペン (Joseph Royeppen) を含め四人を輩出した。
- (69) *Indian Opinion*, 25 May, 1912.
- (69) *Report of the Protector of Indian Immigrants*, 1910, Vol. 6.
- (69) *Indian Opinion*, 15 July, 1905.
- (70) *Indian Opinion*, 8 July, 1911.